
バリアブル・アート過去編 第二章

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バリアブル・アート過去編 第二章

【Nコード】

N9540E

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

それは、全てが決定的となった過去の災厄の中心。その日を以て、多くの人間が全てを失ってしまった。家族、友人、故郷。バリアブル・アート、過去編第二章はそんな災厄を幼く経験した少女、篠崎遙香を中心に組み立てられる。彼女の人生はこの日を境に全てが変わった。そして、それは彼女の未来の全てを決定づけた。生き残った彼女たちに残されたものは決して多くない。それでも彼女は生きていくことを決意した。復讐を誓うことによって・・・バリアブル・アート過去編第二章、開幕。

プロローグ（前書き）

先の第一章から五年後の地球が舞台となります。時系列的には同じですが、第一章を読まなくても物語は完結しています。よろしくお願ひします。

プロローグ

十年前、それを思い出すと今でも身体がふるえる。

なぜ、と今でも考えてしまう。なぜ、あんなことが起こってしまったのだろうか。なぜ、どうしてあんなことが引き起こされてしまったのか。

僅かながらそれを冷静に考えられる今なら、その疑問にもある程度の答えを与える事が出来る。なぜ、そんな事を考えるのは不条理だ。なぜ、その意味はない。

なぜなら、理由などそこにはない。あれはただ起こるべくして引き起こされてしまったのだ。

前言を撤回しよう。今でも冷静に考える事は出来ていないようだ。ここまで記して置きながら、私の手はそれ以上の事を思い出す事を拒否している。

だけど、何とか記していこうと思う。あの事件にたいして、私なりに少しははじめを付けられた今だからこそやらなければならぬと思う。

十年前のあの日。私には全ての幸せがあった。そして、その時、私は全てを失ってしまった。十年前、それは私がまだ十歳の時だった。

破滅への足音が聞こえるならば、それはどんなに不幸な事か。

自らの最後の時を知ることが出来るなら、それはどんなに幸せな事か。

それは不幸？それは幸せ？

ただ言える事は、それを知ったとしてもどうしようもないということだけだ。

これから起こること。あの時起こってしまったこと。それを知ったところで私にはどうする事も出来ないし、どうする事も出来なかった。あれは、起こるべくして引き起こされた。

私達と同じ人間の手によって。

逢香の手記より抜粋)

(篠崎

とてもよく晴れた日だった。こんな日は何か良いことが起こるのではないかと、緩やかな目覚めにあつた少女は心を躍らせる。

「遙香。そろそろ降りていらっしやい。時間なくなるわよ。」

階段ごしに聞こえる彼女の母の声に少女、篠崎遙香はその意識を空から地上に降り、すぐにベッドから抜け出した。

遙香の身体に比べるとそのベッドは随分と大きいらしく、布団からでるのも少し時間がかかる。彼女の父は、成長しても使えるように大きめのものを選んだようだが、遙香としてはもう少し小さく、ものがよかつたらしい。

朝日に照らされて、部屋は少し暑苦しい。遙香は、クーラーの電源を入れると、側に置いてあつた携帯電話の文字盤を確認した。そこに表示されている時刻は7時を少しすぎた頃。目覚めの時間としては十分余裕がある。

遙香は、せかす母の声を聞きながら、急いでパジャマから学校の制服に着替え、ランドセルをつかんで部屋を飛び出た。

二階の廊下は大人がすれ違うには少しばかり狭いが、遙香にとっては走り回るには十分な広さがある。

「遙香。あんまり焦ると怪我するよ。」

廊下の外れにある寝室から顔を出した彼女の父、篠崎直也はそういつてほほえむと遙香を抱き上げた。まだ10歳になったばかりの遙香はまだまだ抱きかかえられるほど軽い、遙香は少し恥ずかしそうに手足をばたつかせた。

「お父さん。私、もう子供じゃないんだから。」

遙香の抗議に直也はほほえむと、

「もう少しすれば、こんな風にだっこできなくなるんだから許してくれ。」

といいながら遙香の頭をなでた。

そうされれば遙香はもう抵抗できなくなる。子供なりのプライドと親に甘えたいという板挟みの間に立たされれば、まだ甘えることを選んでしまうほど遙香はまだまだ幼い。

直也は、遙香を落とさないようにゆっくりと階段を下りると、そのままリビングに入った。朝食のパンの匂いとホットミルクの甘い匂いが漂い、遙香の腹が小さくクーツと鳴った。

「あなた。遙香をあまり甘やかさないでください。」

直也に抱きかかえられた遙香の姿を見て、遙香の母、篠崎恵那は夫にあきれ顔を向ける。直也は、そんな妻に笑いながら受け答えすると、遙香を椅子におろした。

恵那はため息をつくがあまり怒っている様子はないことからこれは茶飯事のことであろうと予想がつく。

直也も妻の言い分は実によく理解しているし、その教育方針にも賛成しているがいざとなつてしまえば、どうしても娘を甘やかしてしまいがちだ。

確かに、子供を過剰に甘やかした干渉することは親にとつても子供にとつてもあまりよくない。遙香の両親もなるべくそうならないように努めることを決めていたが、父親が娘には甘いという言葉通り、直也の甘やかしぶりはその方針から大きく外れることとなつてしまった。

「遙香、顔は洗った？」

「まだ。」

「早く済ませてらっしゃい。」

「はい。」

遙香は元気に返事をすると、椅子から飛び降りて洗面所に向かった。

「すまないね。僕が遙香を甘やかしているせいで君に負担を掛けている。」

直也は新聞から顔を上げると、申し訳なさそうに恵那に頭を下げた。

「そう思うなら、少しは協力してください。遙香もあなたばかりになつくようになって、私も少し寂しいのですよ。」

恵那は、エプロンをたたみ椅子に掛けると直也にコーヒーを手渡し、椅子に腰を下ろした。

「全くその通りだ。これからは僕も心がけるようにする。」

「そういつて全然実践してくれないんですもの。私は少し諦め気味ですわ。」

「うーん。そうだね。ごめん。」

「ああ、そういえば。先日、お父様から連絡がありました。」

「天宮の御前様からかい？暫くお会いしてないが、なんて？」

「いえ、特に緊急の御用ではありませんでした。ただ、遙香の様子が見たいと言つて、近々こちらにお越しになるとのことです。」

「そうか。正直、僕はあの方に会うのは苦手だね。君との結婚の承諾をいただきに行った時のことが忘れられない。今でも思い出すと背筋がふるえるよ。」

「そうですか。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9540e/>

バリアブル・アート過去編 第二章

2010年10月22日00時25分発行